

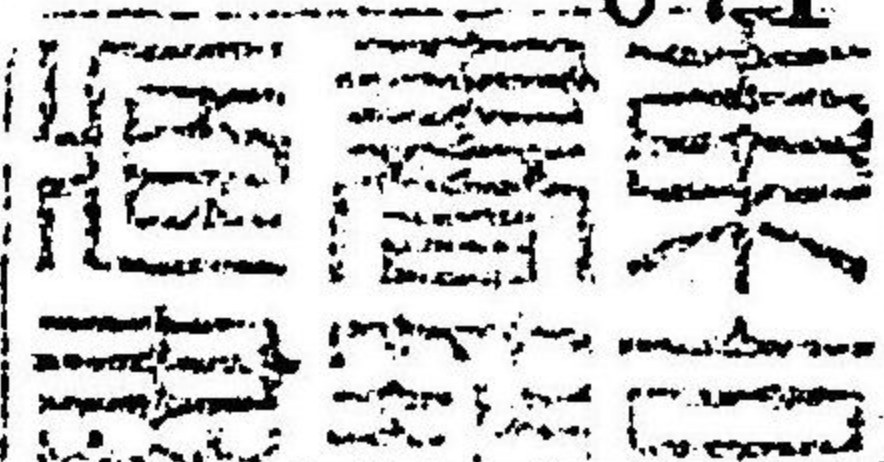
全
四
洋
新
書
卷
一

持31

671

♀

四
本



西洋新書第七編卷之下

東京

瓜生政和編集

○兌銀鋪たいぎんぐらの館たても市街いちがい繁雜はんざつの中うちよりしばしば數回あざな火災かさいに罹ありて燒失やけどし當時とうじの普請ふしん八千八百四十四年はちせんぱちやうしじゆより出来できしもの廣大くわうだい美麗びれいとなく公金庫こうきんこに勝まさり構かまへ内うちに新聞紙しんぶんしを賣出うりだす局きょくありまたと外國がいこく他邦たほうに往ゆき商業しょうぎやを開ひらき居ゐるものもその國々くにの物産ぶつさん諸品しよひんの相場さうばありひの港みなとと出入しゆりんの船ふねの多寡たさうもこの難船なんせん破船はせん亦またのよふ至いたるまで遂ついに一いつ言いひ

送りあの會社中の新文局よりあまねく摺出せあり茲を以て洋船保認會社荷物運漕の船主などの勿論その他と金ども外國へ見世を出し海外と取りむらるるもの皆先銀舗は關係せざる無一とせん

商人會社との英國の何事も衆の力を合せて國を建ると法とまるゆゑ仮令小うある事とりんども皆寄りあひあひ相互ひい援けあひ為し遂んとま然とバ商業をゆるうんとするもその企て一人の力に及ばざれば十人或いは二十人の仲間を建てあまねく爲るを云ふ既に會社と結べバ商賣開業は修たたる諸入用の金高或いはその仕法

その一切を悉く書記と世間知らざるは新聞紙を以てし手形を賣出して會社入用の金を集む其法例たへを商賣の元手金十萬兩あり手形十萬枚とく一人自國の人へ勿論他國の人より買んと言ふ者より一枚一枚圓ヅし賣りあまねく買たるもの年々四五分ほどの利息を納むると定則とる若し商賣見込より繁昌して利潤も從ひ多きとる極りの利足の外に餘分の儲けの割合と出んとと約きまゝ商社に急ぐとらりて速く金を集めんと為る一兩の手形を三分三厘あるいは二朱とらりて賣り又何十枚買ふもの何程の價とまけて

賣るあどのいもわらう手形と買ひたる者へ商社へ手形と
 久し自由の商社より金と取り戻せしと出来きといふも
 手形と相對して他の人へ賣るゝの意の俵たるに故に
 會社盛んふして年々定めりの利足の外に儲の金の割合を
 請取ると多きと手形の賣買も自づと高くあり元金よ
 り三割も四割も賣出せし始り會社と結ぶふその大い
 あるものへ政府へ賣出せし手形の金高に相應する引當
 ものを出し置き官より許しと請て後し手形と賣るあり
 故に會社損失ありび分散するなどのとらむに政府よ
 り彼の預り置たる引當ものを拂ひその金よく賣りたる

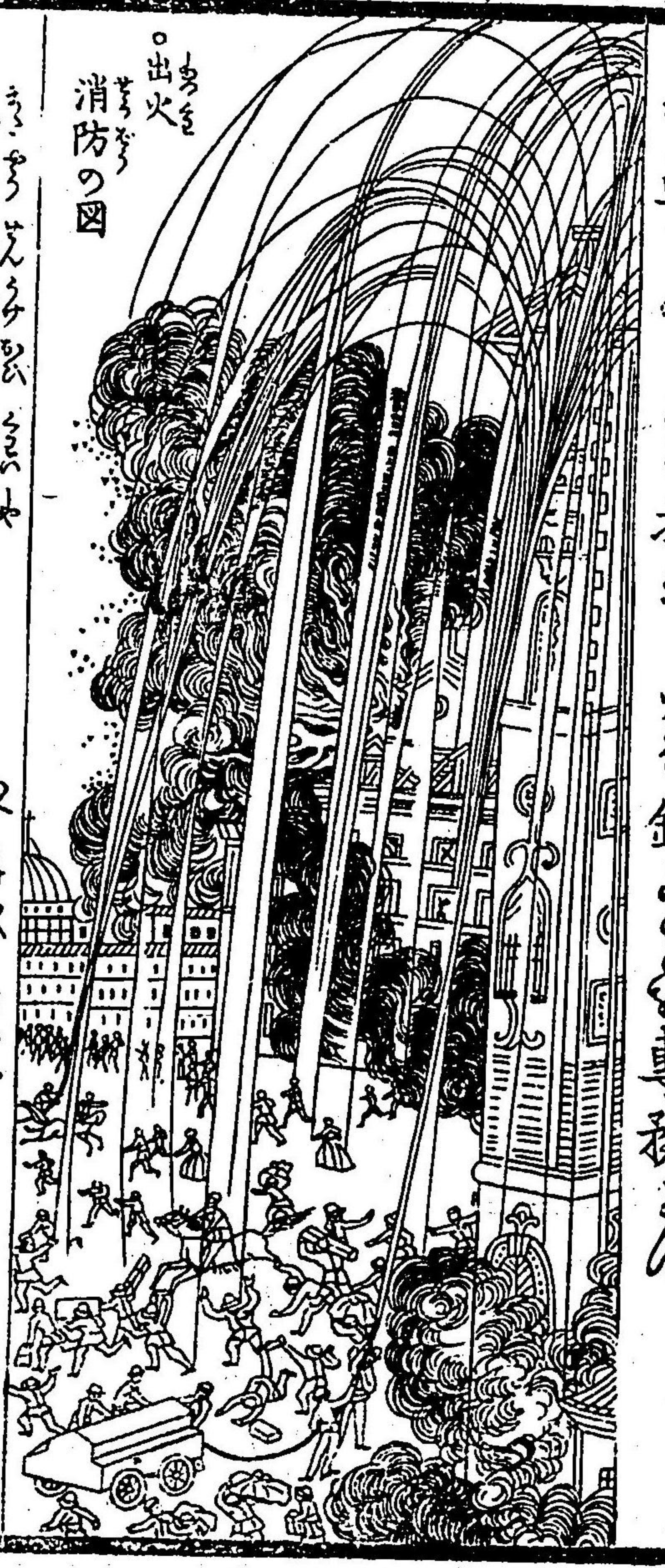
手形の代金を償ふを法とす
 又盛大なる事に至りては政府と商社と力と戮せあはれ
 始むる事もわり當府下の商社中より最も大いなるもの
 大西洋電信機會社諸方の蒸氣車會社瓦斯燈會社さう
 あきあり
 昔日東印度會社と言ふものありて會社中の最大あり
 りあの會社はいま印度の英吉利に属せざる前より
 印度の地は商店を開き貿易賣買を盛大にし且彼の国
 人と會社手ぎりの人數を以て屢々戦争しあはれ屢々勝
 利を得たり就中會社の筆吏「キリーフ」と言ひ一人の如

きへ智勇抜群あり一兵以て終一軍の將帥と撰て擧げ
 らるる大いなる戦威を震ひたり東印度を下し其屬地と為せ
 しハキリーフの功十の七八は居るるとスの如くあれ
 ば東印度會社跋扈し恰も一政府の勢ひを為したる故
 官府よりその會社を廢滅し方今も是の如く
 又海岸燈臺會社あり是は海岸の暗礁ありし浅き
 洲をとりて所の難場へ燈明臺を建てその燈火の光は
 數里の外に照させ渡海の船の標的と為るとあり
 又救船會社あり大氣を含む筒を設け沈没する憂ひある
 船を所々の海岸に備ると八百七十九艘ありてその救船

の為は英國周圍の海中に死を免るるもの年々數百人
 及び云ふ

又家保認會社あり其の會社の法は家の大小に因り年々會
 社へ納むる定め金の高きつてその金高きを納む往けハ
 家若し火災に罹りしハ地震大風雨との為は損失する
 所出来るも會社にて元の如く普請をなし修覆を為し
 修覆を加ふ故は何事もなく平穩なる年の會社に利益あ
 りとの如くも若し大火事などありて請負たる家々おれ
 焼失すれば會社の損亡多し茲を以て當會社より常は消
 防道具を置き且多くの火消人數をも備へ火事ありと聞

直ちふと金を操出—火を鎮まると専務と云



出火
消防の図

又洋船保認會社といふは家保認會社の仕法とその極
り畧同下彼の國の者船を造るよ上等中等下等の別を
別してある故會社よ船を保認よへけぬ前よ出来ぬが

たる船の製造の剛柔を検査ふむびたる後年々社へ請
取る処の金高を定むその見込と大抵上等は二十年中
の十八年下等は十五年の間用ゆると云ふを極りと一
保認あり故よ上等の船ありば年々何れどの金高を二年
の間會社へ差出せば條約の年限中よあの船凶変よ逢ひ
破損さうみ及ぶとあるも會社よてその損失のうちを三
分の一と二と三分の二と始りの取極めあるの船の持主
へ償ひの金を出さるり年間中船無事ゆて過れば會社
の利得とあり破船さうの事多きとば損失とある爰を以
て會社よと大いある儲をさる年もゆとと大損よ及ぶ年も

有りとふん

又地理會社ありあまの地理を糾一土地を開拓一物産と製一出一新國を見出まそうの事と主とする社中ふいて假令バ閣龍が亞米理加を見出して西班牙國を富ませ馬が印度への船路を得て葡萄牙國を富ませ類の如き心まり我が朝も新田開發を始計金銀の鑛山よかく或ひの荒地を起一桑茶をうゑつけ楮漆とうと仕立るみどの一とふ關係ある者ありこの人々と集めて一會社と結べ即ち地理の會社あり

○寶庫の當府下のうち所々ありとりども貌太博物館と

名けしものを以て第一と為すその造營千七百五十九年今より二十四年前より始めて落成せり館の潤さ七十三間四方みして壯大美麗目を驚かす結構をばその入費もも莫大よ及び惣出上りもて三百萬圓金を費やせりと云ふ館内を八局に區別す即ち刺書局寫本局古器局寫画刺画局植物局動物局礦物局藝物局とあり

○刺書局の古代の刺本をそとめ他の國々の古書珍籍と集め藏せり

蓋し英國より板木製本の書物の千四百五十七年今より四百二十二年前の八月十四日よりハウスと云へる者と「スチエ

ツフエルと云へる者と兩人の著述たる詩学の書の出来
 りかゝるを始めと為るとを其ころの書の表紙は多く天
 鷲賊あるひの皮の類ひを用ひたりしが千八百三十年今より
 四十五年前のころより厚紙の上絹と張り或ひは薄くみ
 りたる皮を覆ひ用ひること成りりとるん

○寫本局より往古の諸学者が自筆の書ののらるひを彫刻
 いまもせよ行をれざる前の冊子駁し刺書寫本の兩局みなる
 書冊の数を合せば三十六万餘巻み及ぶと云ふ

○寫画局○刺画局より古今より名譽の人の画額あるひの古代
 の画圖のものを多く藏せり

○古器局より銅大理石異木などを以て刺とたる古代の佛
 像偶像と列ね飾りまゝ太古の貨幣鏡鐘或ひは古城の跡より
 出たる瓦の類ひ希臘國盛んありし時代の兵器羅馬亞細里
 埃及邦貝印度支那ころの國々ある珍器古物を無量に集め
 まゝ銅像石像の如き近代の人の刺し名作は別は蓄りて所
 あり

○植物局より珍草の花奇木の子ゆらひの根莖まゝ蔓皮
 何と言ふあたくなく千種万類の乾くくをを集め悉く名書
 を添へ由来を記しと並べたり

○動物局より細微ある虫類魚るの長大の鳥族獸族とるふ

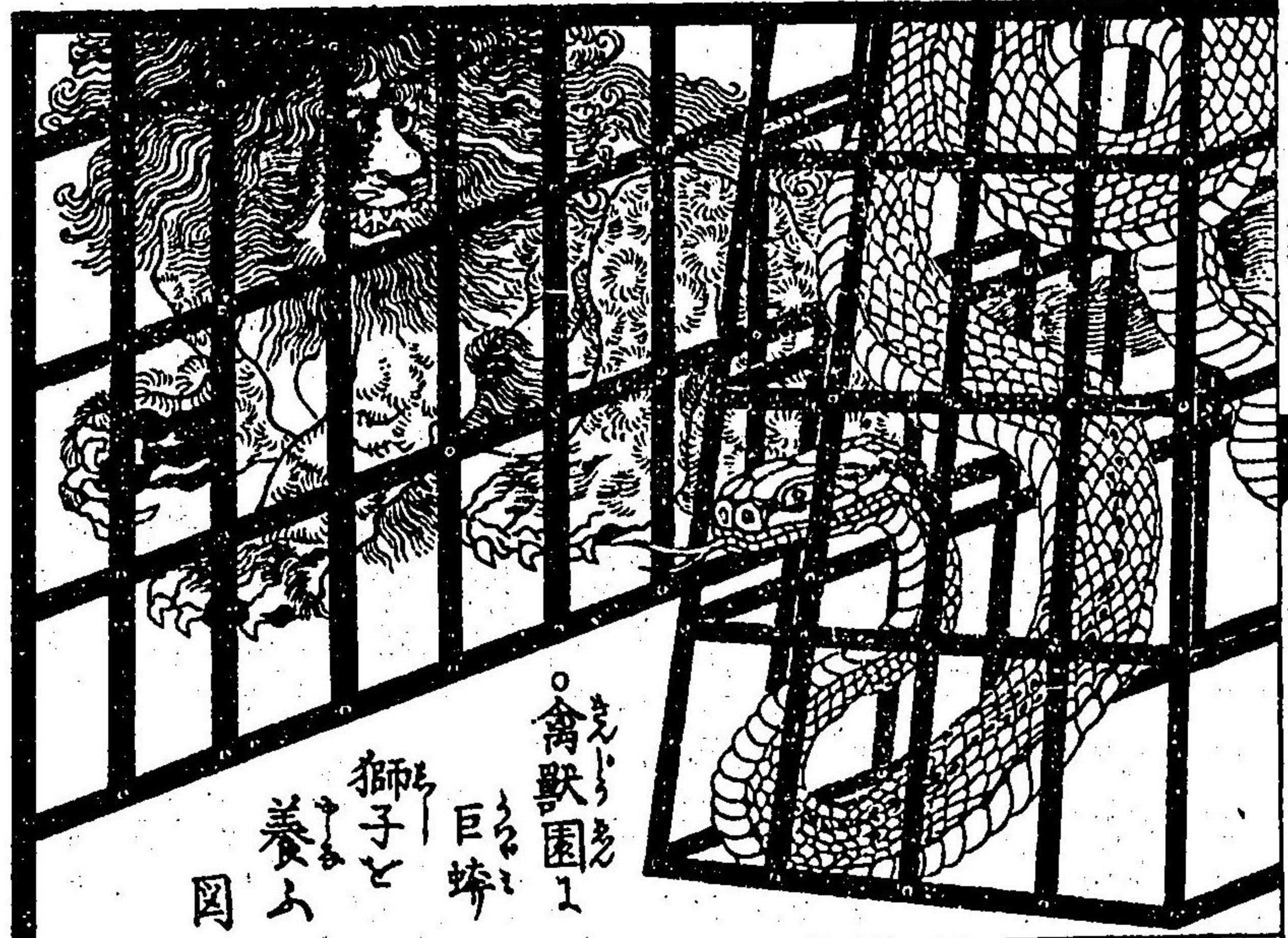
至るまで皮鱗の艶羽毛の色をその俤に活るが如くして貯へたり蓋し魚類の玻璃の罌に藥酒を盛りてその中なるもの多く怪獸奇鳥に至りては名の附がた品無数あり又骨角羽毛の類ひをりと集めて一室あり實に奇觀の別界と云ふべし

○礦物局よりありゆる金屬を始め珊瑚瑪瑙真珠ホの玉石貝屬を集めてもくは部類を分ちて並べおくまはまて一種の奇觀あり

以上八局に蔵まる諸物の博く海外の万国より寄せ集めてるものなれば珍奇の品限りなくあるを蓄ふるは玻璃の匣

を以て或ひは玻璃の蓋をわねひ風を除け塵の防ぎとほまた藥の入りたる燒酎をわねひ各物よく腐れ朽ると無らめ能く蓄へる故に博物学は志はりの皆此宝庫に入りて縦觀しその考への證とまある當局の動物のどたへ世界第一等と称せらるる魯西亞の宝庫といふも未だ看るるところの奇品を蔵せりとあん

○禽獸園多しといふもリジエントパークと云へる街の傍に在るものと以て軒と為すその処に動物学会社に属し千八百二十八年今より五十三年前に創りて企て作りたる壮大美麗の園にしてその時より今に至るまで世界万国に在り



りゆる鳥獸魚虫と集め寄る
を事とせば種類や一千餘
及び就中亞非利加印度新西
蘭とりの熱國より持来り
その多く大なる獅子四ツ小なる
獅子二頭象犀虎の如きハ皆
鉄の欄と設けて是より養ふ
巨蟒の長さ三丈余のものあり
駱駝ハ園の中ハ放ちお見物
の客を乗せ餘情と漆るの助

けと江豚海馬のどたへ大いなる池を設け海の潮を引入れて
蓄ふ猿の種類甚だ多し其の鉄の網をとりて其の放て
り美しき鳥の目を娛しまた其の猛き獸の身を戦慄を者
枚擧まる暇りなき故に人あはれ稱しと世界第一の動物
園と云ふあの所遊觀の客多き年より十二月の間は二十九
万三千九百十五人及びひとふんき盛んありきや
○倫敦より南の方へ三里をり「サイデンハム」と云ふ所の
地は長さ二百六十八間幅六十四間館内の室天井の高き所ハ
十八間二尺の館あり館の北の端と南の端は高さ四十七間二尺の
塔を設け螺旋のりる階子掛り踏で頂上に至るは當所ハ

倫敦より地勢高くして二十五六段の坂と二度上りたる丘の上よまゝの高塔立たる故絶頂の室ありて遠く北の方を見渡せば倫敦の府下より近傍の六州を一目の下みしと美景云ふをうらゐし是や世界有名の博物館「キリストルパレス」と呼ぶのより譯して水晶宮あるは玻璃殿など云ふ高塔巨屋とのみ鉄の柱鉄の梁を窓庇とりの所ハ悉く玻璃板を以て蔽ひたは遠くあまを望むは水晶を集め造りたる宮室の如し故よまの名つとど當水晶宮ハ千八百五十三年今より二十二年前より當り當り始め博覧會と為せしと死世界万国の各物を寄せ集めて觀るが為よ造營みせし處

あまは大殿の四辺ハ風流閑雅より作りたる庭園うち開け泉水のり樹木の林のり草花の植込あり又殿内より百物備へらざるに無き故此所を以て倫敦府下の人の遊び場と為せり蓋し博覧會ハあまを開くと為る始め先ツ大いなる家私作り園を設け泉水を湛て後萬國より知らせ千種万類の諸品を運び来らるあり故に室内より置りのあり庭園は飾り植るものあり池水より放まものありと普く万人より觀る所ハハ各国の風俗器具の巧拙とを知り博物究理の学力を開き旁ら都下の市街を以て繁昌ありむるの設けかり去年壞地利の首府維也納に在り博覧會を以て五

度目の大會と云ふ佛蘭西の記す博覽會場の條下と青
合せと詳うあらん

然れば彼の四十七間二尺の上へ大いなる鉄の桶を備へ泉
水より管を傳へ蒸気の仕掛を以てあの桶の中へ水と吸ひ
上げさせ亦他の管を桶より下げ園の中の此処かこよと
噴水と為す桶より下へ管の地中と送り終へる長さ五里程よ
及び噴水の高きものへ四十六間四尺の上へ昇ると云へり
當水晶宮へ往は倫敦の鐵道駐停場より出る蒸気車の賃錢
常の日ハ一分より三朱を以て定價とせられ彼の園の中よ
て花火を揚る日ハ大人ハ一分二朱子供ハ三朱あり

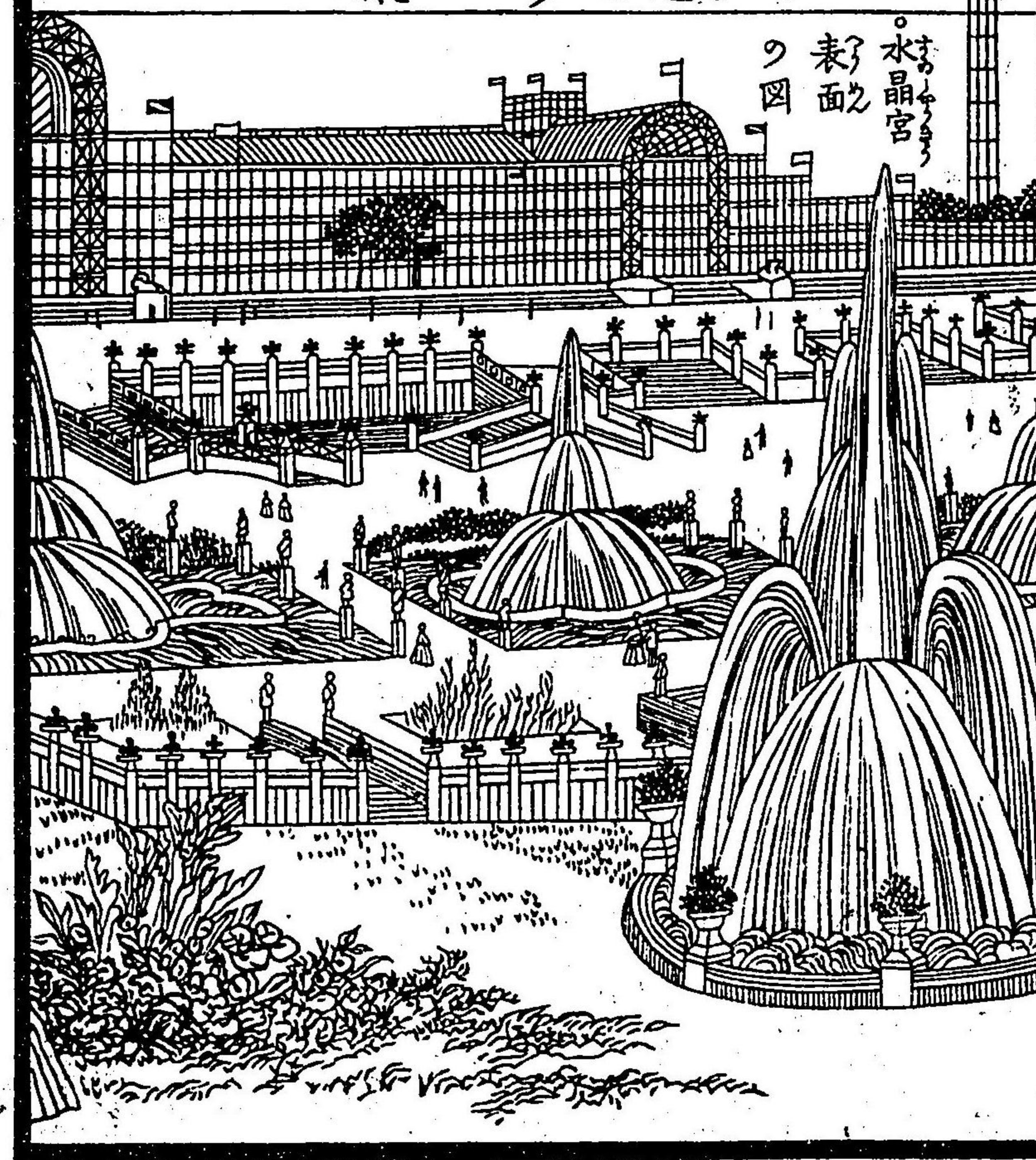


水晶宮中
花火の
図

花火の園中一太いある四阿ありてその四阿の屋根の頂上
立たる人の像の指の先より揚りまへ彼の四十六間の高さ
は昇ると云ふ噴泉池水のさの中へ突出する裡より揚る此時

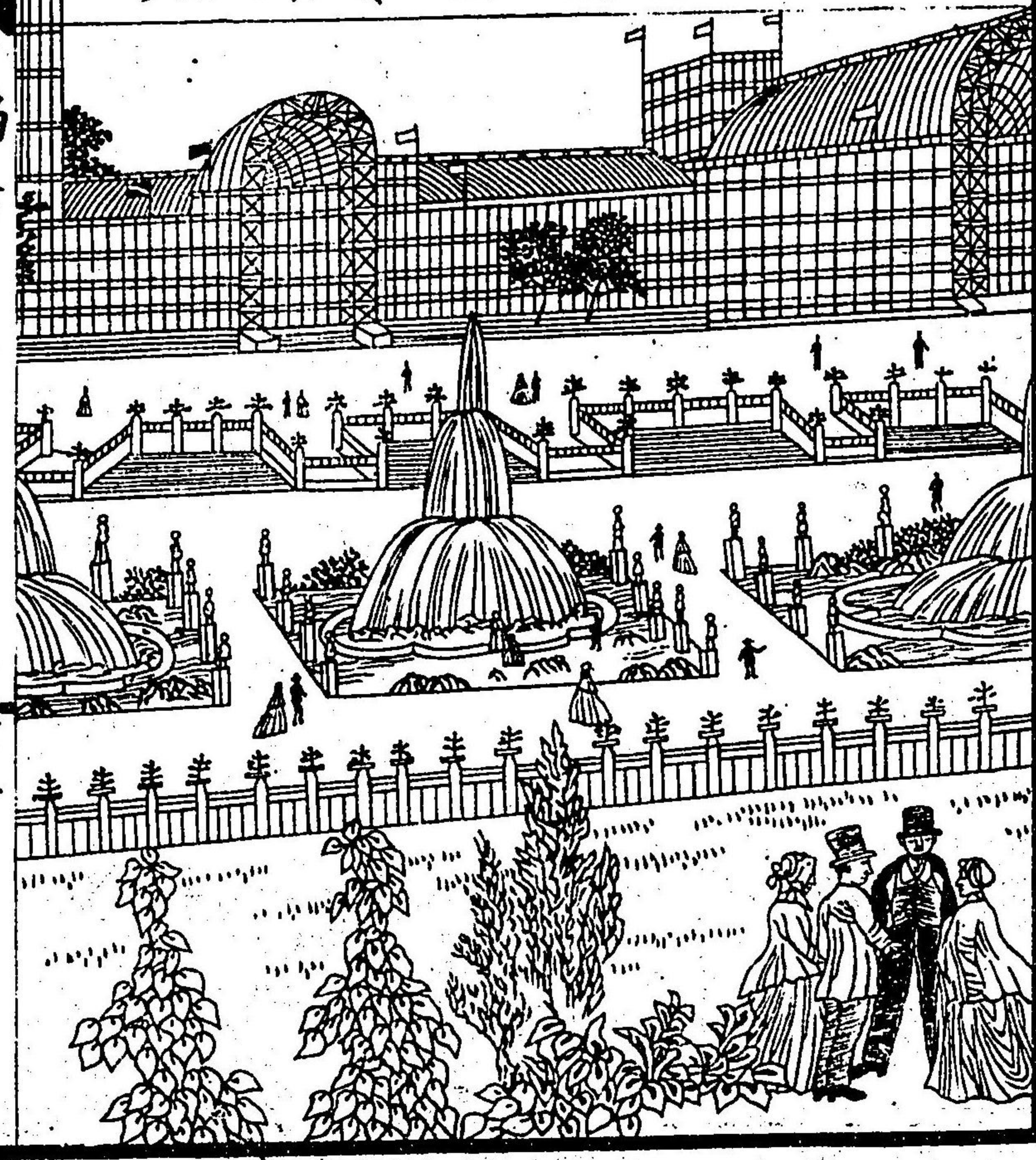
噴昇る水の色あるひの紅あるひの青あるひの紫白黄など光り

変トて
美濃と尽せば
看る者手と打
ち足と鳴し思
へぞ。ヤンヤの声
散動めろ
花火の模様
へ亞米理加
佛蘭西と大
同小異なる



水晶宮
の表
面

故爰に贅
假令バ各國
名高き宮殿堂
塔の如き内
外とも是は模
擬して作り有
名ある銅像石
像の如きハ其
形



体を取りて爰に移し真のものを見るよ整しとて又印度埃
 及とりの様と模せし処より巨大の佛像伽藍を設け四辺へ
 熱國の草木と植て繁茂させ花より實あるへ仕掛を用ひ熱
 氣を送り寒暖計を以て暑さ涼計り彼の地と度数と整し
 する故とを亦寒國の体も作りたる所より實ふ此一局中と
 展覽されば世界の万国を旅行すると同トク
 一の館内より古器軍器貨幣あるひ軍艦砲臺の雛形あり
 ひひ名人の書し油繪の類ひ蓄へる種々の人物と蠟とを
 作り生人形の如くして飾りし所あり
 又一の館内より呉服小道具小間物とを賣鬻ぐ見せし

て市街の如く相連り道路を往し整した場所あり
 料理屋あり酒店あり茶見世あり写真場あり芝居見世物を
 せしめ諸遊戯の場所あり

遊戯の事種々ありその一ツニツを言ん小刀と砂の中へ
 立ちた六七尺を離し居り小き金の輪を投出し投出し
 たる金の輪小刀は陥とべその小刀の輪を投たる方へ
 景物として取るに吹矢とて射る鶏卵の法と同じ金の輪
 の價百文より三ツ

或ひは杭を三四尺ほどの高さありて建あへ杭の根元
 へ穴を掘りぐり杭の上の切口は椰子の実を乗置き六七

尺をうり離して一尺餘りる薪の如き棒を投つてその棒
 椰子の實に當るばあを景物として取るに始めの如し
 蓋し椰子の實に抗より落ても坑へそのまを投出せし棒の
 抗へ當りし響きまゝく落たるものごとく是を取らせど投
 出ま棒の價十本小付百文
 又紙の切を水に浮せ六二三の文字白く顯るを當物
 と為し或いは最中とつゝ菓子子の皮の如きもの中へ一
 二三の文字を書し紙を入と置き是を當りのとして錢
 を掛けさせ當りたる者へ掛たる錢より五倍六倍の物と
 取らざるなど云ふ事を以て謀き遊歩の人の錢を貪り

取る類ひ我朝東京柳原まどうてその以前有りし最中
 水びとと云ふものと同一仕掛とを變りし
 諸勝負の賭事とまる官に制禁せざる公然あつたふより
 上下一般に流行する故人の身代に浮沈あると我が朝の
 如きもの非む爰を以て何れの料理屋も前編に解
 たる玉とろろの道具と哥がうこの如き札と箋三粒と
 へ必む飾りてり玉轉がしを箋も札も入来る遊客ら
 みの具を以て勝敗を分ち負たる者グその場の酒食の代
 を拂ふなどの事を用ゆるあり
 酒店より若き女二三人ぐらゐ他所より来り遊び居り

物有りげある若男よの見世よ立入とバそを挑戦し一王
 ありづー札合のせ塞投げなどの遊びよ引入と初め賭
 ものを小さくして頻りよ彼とが為し負け後よの奮発の
 思ひ入をみて賭ものを段々大きく極めて大きく成
 るよ至とバ忽地若き男を敗し最初取らざるもの紙
 取り戻すのめあし彼が持たる物を取り揚げ果は囊中
 を拂りたるなどの事なり我朝の俚俗よ云ふいうさふよ
 掛ると同ト類ひあり

水晶宮の中よ上等の芝居二ヶ所下等の芝居五ヶ所あ
 り何と本舞臺の正面より見物場へ向へ往くと些づ

丸を附る作り棧敷へ左右正面とも七段一構へ上の
 四段めごろより高く昇れば追々舞臺へ遠くある故價安し
 我朝の芝居あしバ龍棧敷と云ふ所の如し
 大芝居よ幕なり幕の布は多く赤地青地などの天鷲賊を
 用ひ真中より左右へ開くやふ倣たり中芝居小芝居よ
 至りくへ幕あり

芝居舞臺の前よ五十人あし一百人あしの出る笛喇叭
 三味線太鼓など種々の鳴物をまじへ音楽を奏するごと
 あり是は我朝の芝居あし下座囃子方など唱ふるもの
 如し英吉利よハニエツキと云ふ囃子方ハかく大勢あり

とどを唄うふひ一人うゝ入と替り入とかがり唄ふ
 子方の前うへ号令をきる者鞭を持つて立ち指揮をまよ随
 ぐひ笛喇叭一整ふ音を發し止るその順序嚴然と
 して音声の追先づ失ふけとて謠唄ふもの一人あり
 と雖も謠の文句あさやく聞取らるゝと我朝の芝居
 てある出語りの淨瑠璃の如し

國王芝居へ見物よ来るとたへ音樂と奏せその聲
 り王棧敷よ登り椅子よ即を見て音樂やむあの時芝居
 中みらる見物人一同よたちと帽子と脱ぎ礼と為し國王も
 まゝ冠を脱り礼をうま

上等の芝居うて酒を飲と煙草を吸ふとの支一切停止
 る酒を飲と煙草を吸とんと思ふものへ別よあをを用ゆ
 るが為よ設けし室のよ暫時席をさけ其所へ退くとて
 休息所の如し

芝居の役者み限らむ惣て藝人へ花を遣るうへ藝事ま
 て藝者舞臺を退くとするとた掌を打ちあうしあをを
 呼び戻し花を投げ與あるり花の實の草木の花うて
 金錢とりのものよ非む故よ芝居の中うて種々み色どり
 作りたる草花を若き女の持歩行て賣るなり蓋し花の
 價へ一把一分ぐらうり一圓半ぐらうりまで至る

我朝の松井源水あるもの千八百七十三年今を去る一昨
 年彼の水晶宮の大芝居よあつて獨樂の曲藝を興行あ
 りし其術を引込まんとすらば益々見物人竟ひと
 手を叩きあそを呼び戻し頻り草花を投与へり然れ共
 花を貰ふと言ふことの豫る聞居り矢張我朝の如く金子
 何らひの反物とりの類ひあらんと思ひの外豈とららん
 や實の草花あらんと斯の如きものを何ふり為さんと顧
 きたるまき捨あつて引込まんと為しなれば彼の國の出方
 の者押しめ貰ひし花を持て退くべし明日出る新文紙よ
 日本の松井源水昨日水晶宮の大芝居よあつて見物人よ

り花の數何れを貰ひしと云ふと書のまるを以て國
 中へ評判高くあるなりと言ひは余羨みく花を持て引込
 たりと話しぬ摠て藝をまる者舞臺に在りての謹んで忽
 せふまるに能を其故へ草芽をとりて翌日の新文紙よ
 出さる欠びなどをまれば猶さうの事藝術よ身を入さざ
 る由を以て盡く誹りて出ま是外あらざる新文局の者ら
 日々の事ゆ名書出ま話し小尽き斯記ある小事よま及
 ぶと雖も藝を為るもの甚しき薬とあり是が為よ大
 けよ上達を得ると云ふ
 英國よの唄獨樂の如きものよめ我國の如き形体の獨

倫敦市中
花賣の
写生



樂ハ皇國より渡りしも無
りしは始めの程に取らざり
珍重したり故に今日に至る
まを彼の國へ多く獨樂を送
るあり
同人の物語りよ曲藝の休息
中一連の者の写真繪を伴ひ
往たり娘と子供よ持せ座中
を繞らし見物人へ賣し小
彼の地より通例三百文を

の写真繪を金一分づよハ買ふあり蓋し男持出く
賣るとたへ三百文とひとを買ふもの無しと云ひき
芝居狂言の仕組よりハ亞米理加佛蘭西より小説きたる
そのと変りるれば茲に省く
觀場を為るものハツの車へ小屋の道具あるひハ觀場
き物を積むツの車へ一切の世帯道具を乗せ二輛の車
を引たり行爲さんと思ふ所へ往き小屋を掛けあはれ
始む蓋し小屋ハテントと名づけたる厚き布を張る斯
の如く小さな觀場へ入り口より居る者番をあらがうハ丸
ブルを鳴し太鼓を叩きて囃子をまると通例あり

千八百七十三年今より二年前亞非理加列の内「サヤン
 國と呼ぶ地の産あるよりゆく十七歳ある黒坊の女
 同所へ見世物に出たりあの女へ五体總て二人前ありて
 寸分違ふところなき一對の人をれど尻の肉の接り合ひ一
 人とありて生きたる故一人を撃て一人も疼一人腹が
 虚れば一人も腹が虚るなど何事も皆一身の者と整一
 是ら最も珍なり云へり
 まる三尺ほどの魚を鸚鵡の如く人へ似せりの言ふる
 どの観場出て木戸銭づれも二百文をとる然る不當国
 への蛸の類は一切る一とく大きき通例の生くる蛸を見世

物を出し木戸銭三百文をとり一見する者群集るなり実
 小珍らしき物あり有らん
 或ひは観場ふより人空中に在りて藝を為し烈火を掴ん
 て戯弄物ふまるさうの不思議を為す然れどもその實を
 舞臺の真中へ人へ見えざる様を造りたる玻璃を出し置
 戲房に在りて仕掛を用ひ種々の働きをまよはし其人の影
 天井に掛たる鏡に移りそよより其所彼所へ人へ知れざ
 る様を鏡を以て影を傳え終る舞臺の真中へ張りし玻
 璃の中へ頭を出るを見物場より見るとたゞ真の人あり
 くとあはれ為す如し故に我朝の商人も彼の地へ往き

始めくわつる観物場ふ出逢へば儲とを世ふ云ふ切支丹の
 法るまなど思ふも有るう仕掛りのとも巧となれども本
 戸銭ハ二百文をりて定價とま
 人形芝居のり まみ蔵あり 軽業ハ棒などを建るふ我
 朝の如く肩を以てせむ腹へ立るもの多し棒の上へ昇り
 ーもの大の字のりひへ吹流ーあどまると 皇國と變り
 むー
 藝をまると者ハ何をも達者ふして上手を尽しぬ稀は彼の
 國の曲藝者 皇國へ来りて與行まると有れども是等ハ業
 前下等の者と云へり

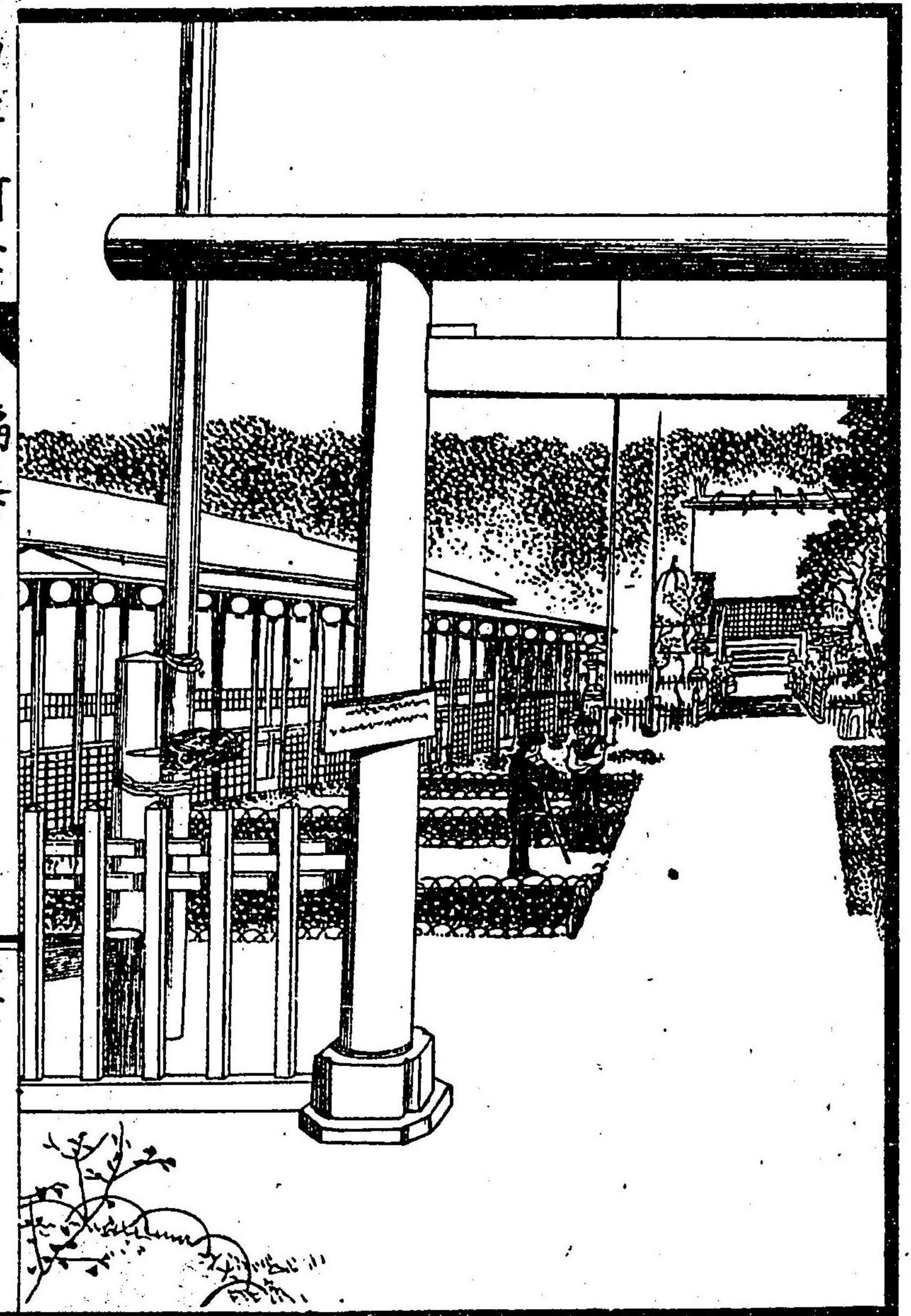
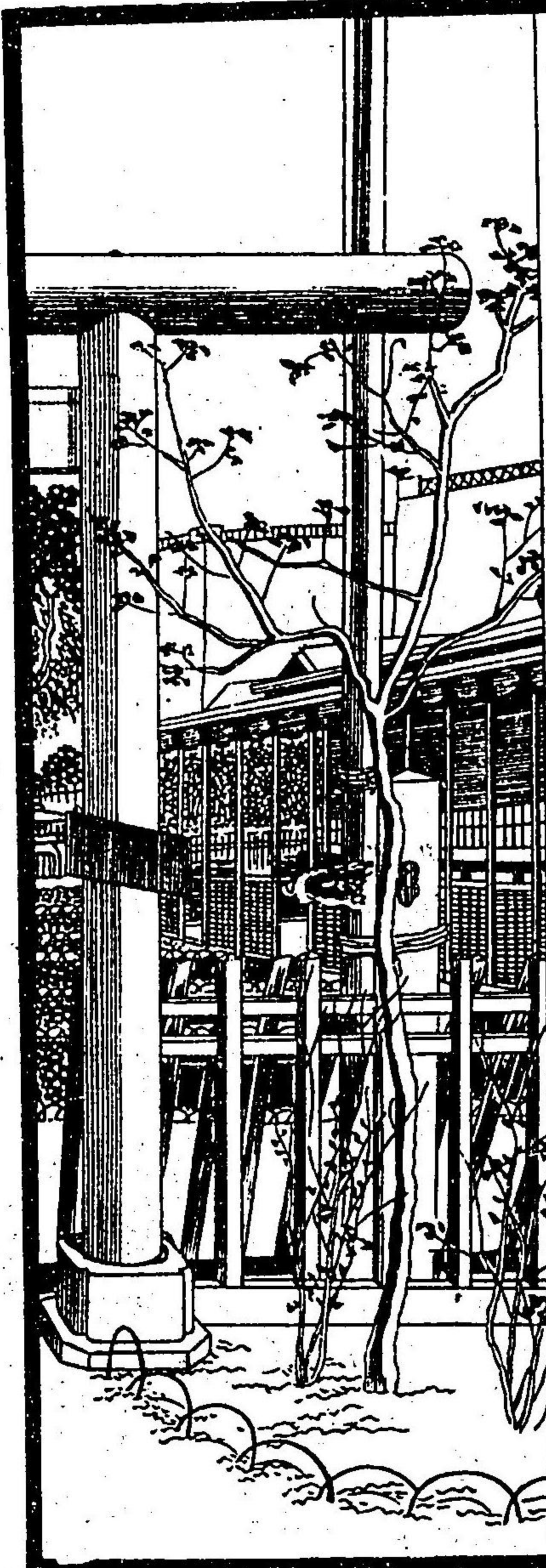
車少く引歩行観物ハ水晶宮もその多しハ倫敦府下
 みく「タカマチと唱へ三日四日あるひハ七日ぐらゐ續き市の
 立場所のりその所へ小屋を建て與行ま
 水晶宮中斯の如く繁昌るる朝もたより夕アみ至るも
 猶その半を順覽まると能く然とも彼の國の人の話
 を聞くは往年火災に罹り焼失せし所のり故往昔ふ比べ
 らへ十分の三四を存するまると云へり舊觀の壯大今を以
 と想ひやるべし
 ○「アレキサンダリー」の花園ハ近來開きし物ふして水晶宮
 を麗せんと為る勢ひのり就中人の珍とまるとハ千八百七十

「アキサンタリー」
花園中

○天照皇太神宮

及び
日本造商家の
真圖

外ふ神樂殿のアマ狗コマ狗石燈籠と置き社
前の流とよ及橋を架し欄干の偽宝珠紫銅
を作る庭中の草花樹木に至るまで總て日本
の産を用や當社地の境内廣き二千五百坪余
と云ふ



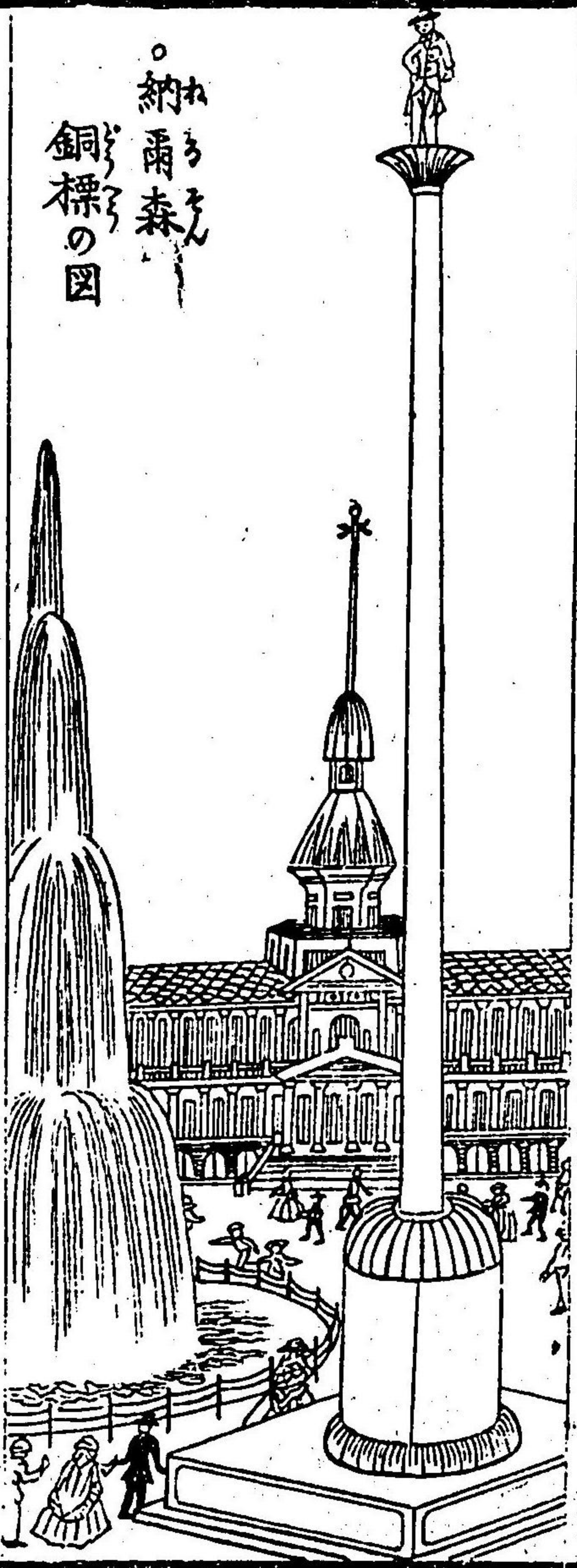
四年、埃地利の首府維也納博覽會、美名を得、天照皇太
 神宮の御社を英國のコンストルブリーイン及びアレーネンの
 西人日本よむひ此園中ふ祝ひ祭り華表の内の西側へ日本
 の二階屋を作りその物産を商ふ絹木綿瀬戸物塗物小間物
 米味噌醬油酒一切のびと云ふとみ、故に此境内に至ると
 日本の地は在るが如く、當社の檜の柱目を用ひ、白木造り
 り本朝の番匠松尾伊兵衛山添喜三郎近藤半次郎宮城忠右
 衛門箱源吉是を建築、明治七年二月、斧を取り始め、同年六
 月二十日の落成あり

○蠟像場、倫敦の市中に在り、蠟を以て人の像を造る小我

朝の生人形と云ふもの、如くか、遊歩の人をして見物せし
 むる所あり、館内より近世の豪傑二百余人の偶像を飾るその
 内英國近代の王族あり、ひ、佛蘭西帝初代拿破崙の肖像又
 へ支那の林則徐が偶像などあり、何をも彫刺至妙を極め
 たる故突然あまふ對まれば生る諸英雄が列席あるると
 驚き疑ふをくまう、是も展覧の一境あり

○倫敦府下路の傍らに銅鉄珍石を以て刻きたる偶像を
 安置せし、數四十三あり、内亭々たる高塔の上に在るもの
 四ヶ所あり、蓋しあの偶像ハ何をも仁君功臣を追慕し、刻
 きたる所あり、其徳政を記し、其忠勲を録し、後人を以て恩沢と

忘るるを今んとの設あり故よ此諸英傑の誕生日よ遇ハ祝ひ祭



。納爾森
銅標の図

るの少くも然れども我朝の如く偶像の前供物と備へ造酒と
供し燈火を獻むる類ひのてゐる四ヶ所の高塔のく奇巧を極め
艶靡風雅ありと雖も就中壯觀と為るもの勇將「ネルソンの銅

標ふりて一丈七尺の立像高さ二十七間の銅の圓柱の上小
徑へたり標の礎の直徑一丈礎の四隅に巨大の石を以て彫
刻たる獅子を置き礎の四面より「ネルソン」一代の勲功を
圖を標の左右に噴揚の水ありあの建築の總入費九万九千
圓ありと云ふ

名ハ「ホラチエー」姓ハ納爾森と云ひ「英吉利海軍中前
後無類の勇將あり」あの人や千七百五十八年同國「ホルホ
ル」府の市街に於て生る父ハ「バルナム」ソルプと呼ぶ地
の縣令たり納爾森幼推して北「ワルサム」と云へる所の學
校に入塾し勉強衆に勝れたり「千七百七十年の夏其

伯父「サツクリアング」ある者一軍艦を以て英國周圍の海上を巡邏よかふと聞き年々十二の童児をもとを伯父より従ひ直ちよその軍艦に乗せしめて全國の海岸を巡りて一見をさんと做せしむ政府の模様かろく「サツクリアング」軍艦ハ他所へ航しまたしとの命下りたれば納爾森ハ大望を失ふものより更ニ亞細亞の一隅ありとを見物し来らんと豫てその船に乗りと居たる印度の人と共に東印度の地より少く彼の土を順覽する者幾程多く郷里へ帰帆し及びたり斯て後千七百七十七年政府の海軍局に於て指揮官の人撰りし時始り

試験を請たる「ローウエスト」を名けし小軍艦に附属の号令役を奉らば二年の後轉じて「ピンチンブローク」と呼ぶ軍艦の指揮官となり亞米理加加西印度の地より往きたりしが計らば病ひに罹り程多く又本國に立歸りし時一納爾森二十三歳「ネボス島」の裁判役する「スイルリヤム」ウードワルドと云ふ人の娘を娶り妻と為しぬその後千七百八十九年の頃より仏蘭西國ハ彼の大變革の兵亂起り昼夜合戦止むとた無けれど英國ハ既ニ亞米理加合衆國を獨立不羈とす一和睦とのひ國王若耳治三世よく民を治め宰相彪的と云ふものより賢明よく賢

場を盛んみし百工を励まし亞米理加合衆國を攻伐せし
 軍費を償ひ頼り富強を計るゆひ佛國の戦鬪益々
 盛んよ成り西地のあひだ僅りの海峡を隔てしものあり
 ばその餘殃おそし未らんとて國內自づと騒々たる
 小乗ト自國の内を既し佛人よ應ぜんと計るものあり
 有るより聞えられ宰相彪的の當時の形勢と熟視し仏
 國の暴徒強大に至る禍ひ免るるを憂へ終に
 歐羽の各國に説諭し諸政府合従して佛蘭西を討んと決
 し英國より數百萬圓の黄金を歐羽の各國に送り佛蘭西
 追討の軍費を充てさせ共し海陸より兵を廢し屢佛蘭西

と戦ひ海軍より納爾森の強勇よく衆人の志気を励まし
 戦ふと勝を得ざる事無しとのこと陸軍に彼が為し
 破らざる國王の次子約克公の率ひたる兵荷蘭の戦ひ
 又利を失ひしより以来軍費の金銀も亦く多かれを租税
 の高日々増し國人らおそを納むるも堪えざる故に
 佛蘭西と和睦し干戈を解うんと欲計るもの過半よ及
 べと宰相彪的のあくる用ひを然もども陸軍に毎戦彼が為
 し破らざるものありは金銀の費へも亦く莫大よ登りたる
 故海軍を増し嚴しく境界を固め而して仏國の所有ある
 海外の領地を攻めて是を取らんと企てたり爰よあはる

納爾森の大砲六十四門を備へたる「アガメモン」と号けり一
 軍艦より乗り精兵數隊を引き去る日巴拉大の海峡
 を繞り地中海に攻りつる船と土命の港に繋ぎあはるる
 仏軍の動靜を窺ひし後進んで敵兵の要所と頼む「バ
 スチヤ城」を攻圍し一大激戦のゆゑ是を陥れ更に「カラ
 イ縣」をも乘り取り取りあひの合戦たる英軍を悉く仏軍の爲
 んに破らし勇氣大なり衰へたは榮々たる勝とり國人の
 志力を引起さんと思ひ勝誇つたる佛軍の猛烈あるを事
 とせしむ一人納爾森は先に進む或いは指揮し或いは
 自ら銃を取り万死を浸し敵に當り終に仏軍と打ち敗

り大りの勝と
 奏したる
 戦ひ正し終
 らんと為る
 り臨敵よ
 り打出せ
 弾丸の為
 眼を抜れ爰
 一眼を失
 ひたり



西洋新書

七五

七五

千七百九十五年三月十五日英國の水師提督「ホサム」と云
 ぶ者軍艦數艘を以て佛蘭西の船隊へ攻かり大いに
 攻撃し及びたり。佛の船隊猛勇を英の海軍も靡
 うされ既に敗せんと為せし處を納爾森一船隊を引具し
 あをを救ひ奮激突戦のり。味方の旗色とを遂に
 勝利の凱歌を揚たり然るに納爾森の戦功衆も勝れたる
 と數回ふして武勇策畧凡人の及ぶ所は無くとも翌千七
 百九十六年「ネラバ」と名けたる大軍艦の水師提督は
 率らるたり茲に於て納爾森に合戦の進退我が掌中の指
 揮にまかせば不思議の功績を現はさんと後思ひ起し望を

らふ機會を窺ふ折々大砲四十四門を備へたる佛国の
 軍艦は出あひ折置りりと兵を進り直ち小軍を向け
 以て大いに攻撃を開き。戦ひ數時間及ぶの後、佛の
 軍艦を棄つとす。斯く後、佛蘭西の所領たる「亞非利
 加」の西岸近き「テネリツプ」と名けたる一島を伐んと
 遠く其地へ船を進り有無なく陸へ攻上りて敵軍を
 操出し來り戦鬪激烈勝敗最中に見えたるに納爾森又
 例の如く真先を走り味方を指揮して居たる所へ敵
 より劇しく打出し弾丸無數を飛來り最終うと見る
 うち一發忽ち納爾森が右の腕を利骨碎き血煙り上

けり打めつべ流石重傷は堪え得ざりて既は危く見えたるを養子「ネスビット」と云ふ者走せしめ来り是を救ひ辛うしく船中へ引揚たり

納爾森は再び重傷をかみむり戦場の用は當らねりおき後療治なきんと本國へ立戻りし英王初め諸大將ら彼が働きの數回衆を擢んでたるを感トその恩賞として年々黄金三千圓を與へ且勲功の大いあると國人はふる普く係範と為させんが為は數回の軍功と掲げ記して功牌は擧ぐるに左の如し

第一 仏蘭西和蘭西班牙との大敵に當り彼が戦隊と接

戦ふ及ぶと四度城を乗り取ると三度陥ると我が船將の九死を援け又ある時を「ライン」船七艘「レガット」船六艘「コル」ヘッテス船四艘猶その他敵船十一艘を分捕り陸地の血戦は於ては既は百二十度に至り全身は受る疵大小八十三ヶ所先達て一眼を失ひ今般の役は右の手とゆ失ふべり云々

然るに此記を二見するものち納爾森が勇武の勝れたるは賞に驚くものあり各あると習ふんと志気ならしむる奮發する故大の勇氣は起りたり

再説納爾森は右手の重傷や愈たれを數度の危難をあと

とせせど早戰場のむくんと我軍艦へ乗込る政府の命
 令を俟居り時、間諜より注進つる、仏蘭西の大將拿破
 崙軍威を近隣に震ふのゆゑ、猶亞非利加内より打ち入り
 埃及國を併呑せんと土倫の港より軍艦數艘を操り出
 南を指して出帆せしと聞えりれば、納爾森はあまを我
 願ふところの相手なれと喜ぶと限りなく直ち政府の命
 を乞ひ味方の一船將「カインセン」が兵と合併し、船を大西
 洋に廻らして、日巴拉太の瀬戸に入り、地中海を走らせ、仏國
 前後隨一たる拿破崙一世の後を追ひ頻り、船を進たり
 時、千七百九十八年今より七十七年前のとき、みんかく

納爾森は伊太利の海岸を乗り廻らして更に進んで亞非利
 加内なる埃及國の「アレキサンドリヤ」港に船を乗り入
 一時、雌雄を決せんと拿破崙が乗りたりと言ふ、仏の軍艦
 を求むれど一人の敵兵も出合ざれば、一時望みを失ひぬ
 然りと雖も此終止べきあらねば、夫が容子を窺えんと船を伊太
 利の西々里島に戻り、時、仏國の軍艦數艘、埃及國のうち
 亞不幾湊に繋り居るより、報國ありければ、諸あそめれと雀
 躍なりて勇まらち西々里に當時、我と同盟の國ある故此、
 うち猶新の彈藥兵糧とを積入し用意とのひりれば、直
 ち埃及國よりの返り、亞不幾湊に乗り込りたるみ果して、仏

國の軍艦四艘青白紅の漆のたる國旗を風に飄々猛威を
 たりて見えたるふぞ有無の問答も及ぶ砲を放つと攻
 かり戦争數時激烈あるの後終に仏蘭西の兵船四艘を納
 爾森が手に陥しこれ非凡の武勇を顯はし倍英の海軍の
 威名を四境に震えをたり實はの度の功績大いありと
 英國奉つて賞讃し衆議の之を納爾森と諸侯の列に加へ領
 地を與へしとのあはれは役料とす年々九千圓の金を取
 たり然るに納爾森は大功をたてると屢あるを以て英王若
 耳治より例に少くも恩賞を得るとのあはれを西々里島の一
 地「ナプレス」の国王より各國の諸侯とむといた扱ひを以て

我が領分のうちを割て納爾森に贈りたり

斯の如くあるに英國大い力を得てその勢ひは衆ト早く
 佛蘭西を攻頃けんと更し國內に令を下し數百萬圓の金銀
 を徴し集め同盟する地地利魯西亞より小贈り軍費の援け
 とし相共し兵をまくりんと計り翌千七百九十九年秋八月英
 國王の二子約克公を大將として大軍を起し和蘭に屯みし
 たる佛兵を追ひ退けんと海陸より進み撃たりし海軍の方
 へ納爾森は是れ大い敵の船隊を破り和蘭の兵艦若干
 を今捕まへ頗る勝利を得るとのども陸軍の方へ戦争屢の
 後まて敗北し及びり爰に仏將拿破崙ハ埃及へ攻登りし

後少く亞不幾港に残り置たる軍艦四艘を納爾森の爲に奪
 ひ取らんと雖も更は屈せざる深く内地へ攻込とく倍軍威を
 震いたり。此年仙蘭西へ帰り来りコンシユルの職に昇
 りてより暫時平穩の体を示せしが幾程もくも戦端を開
 き埃及に於て土耳其の兵をその首府改羅に破り自国に
 在りては地利の兵を破り終は是を以て降らしめりよ
 り歐亞の西辺に殆んど仏の所領とありんとせり爰に於て
 千八百一年に至り又北方の各国も拿破崙と相親と英國と
 の交り薄くあるより英吉利の勢は自づと衰へ且貿易の
 便りをさ失ひしれば國內ややく疲乏生じ憂苦の色を

顯へたる故英王若耳治の宰相彪的及び諸大將と計り仙蘭
 西と同盟するに連國を撃んと納爾森とて海軍の總督た
 らしめ數艘の船隊を募りてその地へさし向けたり爰に於て
 納爾森は北海より日耳曼洋をまは波羅的海の入口あり連
 國に攻よせたり。彼の國も兵を出し相互の軍艦
 を接へ大の戦端を開きしが連國勢勇なれどもいささか
 納爾森が強兵に敵まじき戦ひ數回の後軍艦十六艘理尼船
 二十艘を焼く討る者二千余人に及び大に敗北なりけ
 る。納爾森が兵勢は愈々その首府ある哥卑合給の市街
 へ包絡丸を打込んで人家四百軒を焼くは進んで京城へ

納爾森の肖像



迫らんとせしむるに、噫、國勢大い
 一恐と納爾森が軍門に和睦
 を乞ひ向後局外中立を守り
 佛蘭西の味方を致さざれば
 一我誓ひるる故英國とを
 許したり爰は於て水師提督
 納爾森はさうに進んで魯西
 亞を討んと謀り、ふとの時
 ふ當り魯西亞の「ホウル帝臣
 下の為に弒せしむる歴山王其

位ふ即ふかより英國と好を通じ連合するに至り、納爾
 森は下まづ本國へ立戻り、斯の如くなれば北方の諸國又
 英吉利と相親し、少くも勢ひを得るふ似なきと陸地の戦
 争に至りて、佛國倍強大ある故終に抵抗の及び難きを思
 ひ千八百二年三月二十八日佛蘭西と同國「アミアン」の地よ
 於て和親の條約をむまん、なり蓋し英國よかいつく、佛蘭西
 大變革のときより乗ト兵船を以て、仏蘭西、西班牙、和蘭との
 所有たる海外の屬地を過半攻とう、就中東西印度の群島中
 彼不屬せしもの、大抵あるを奪ひ尽し、此數年の間海上波
 濤の戦争、大軍艦と失ひ、僅く二艘に過ぎざりしとを

敵船を掠奪しつゝひの破り或ひは焼棄しその幾數百艘なる
る後知らず爰を以てあの征伐以來英國の海軍と五大勅中
の至強と稱し終に海上王の名を高うするに全く納爾森の
勇武なるに因とる

千八百三年の五月英國と佛國との和議破らるゝび兵端
を開くに至り屢戦争し及びなれど海軍總督納爾森なる
者ありて以て波上の戦ひに於るに倍兵威を震ふといふも
陸戦に至りては彼が為し破らるゝと多くしに仙軍日増し
強大あり然るに佛兵猶英の海軍とを破らんと千八百五年
冬佛蘭西および西班牙の兩國聯合し軍艦三十三艘「フレガツ

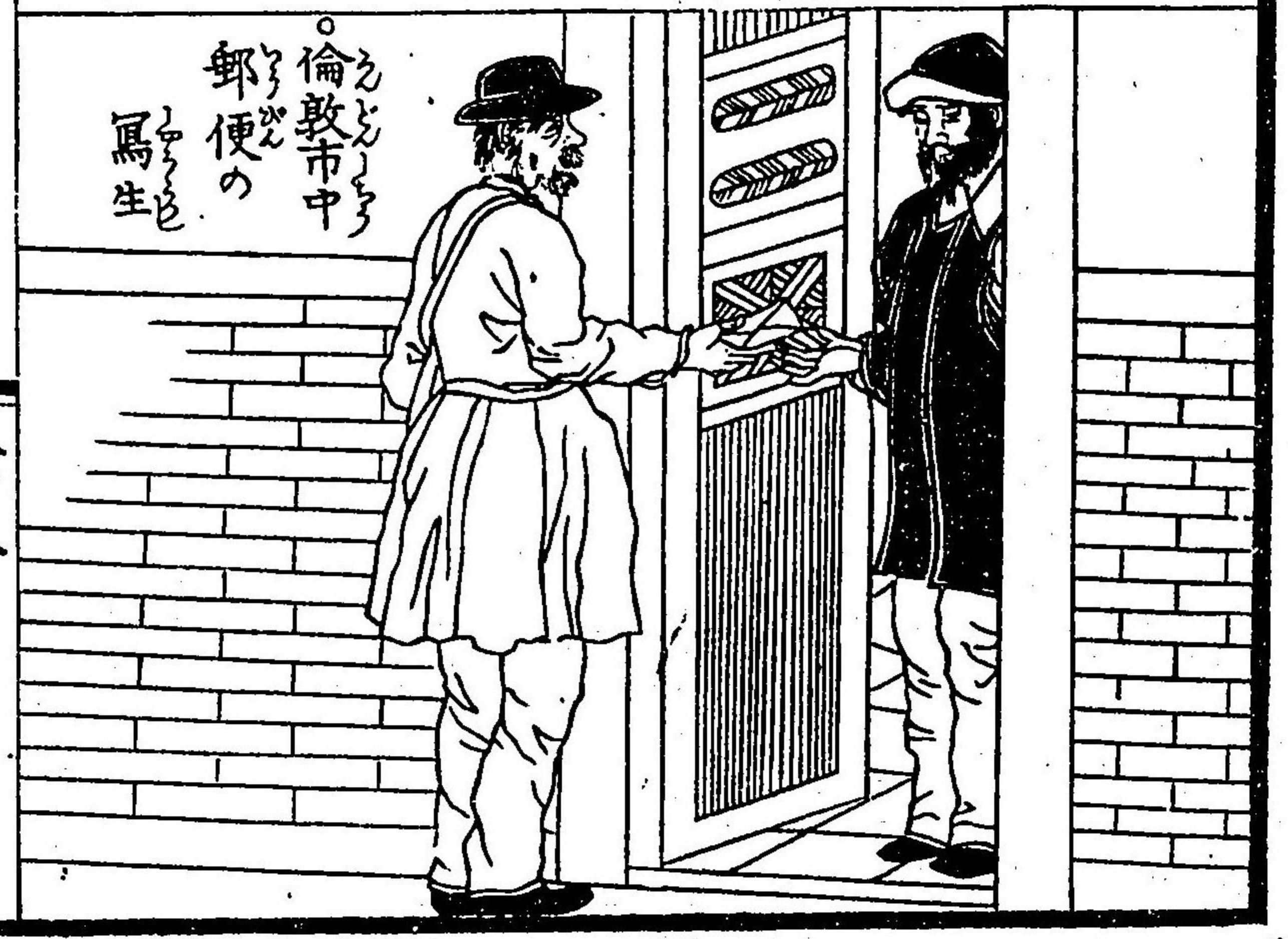
ト船七艘を以て大いし海軍を起し英國を襲ひ討んと為ま
し聞えられれば英王若耳治ハ納爾森を總軍の大都督と定
め軍艦二十七艘「フレガツト船四艘を以て去るを逆ひ撃しめ
られバ納爾森ハ總軍艦三十一艘を率ひ大西洋より葡萄牙
を廻りて西班牙の海岸へ出たり時同年第十月十九日仏
蘭西西班牙合従の總軍艦四十艘 地中海の入り口「巴拉大
海峡のとらゝなる「トラハルガルの岬に往合し茲に於る
英仏西の三國の軍艦合せて七十二艘の船隊追々近づくと
従ひ次第に炮を打出し敵味方の旌旗進むものより退く者
あり廻るものより既めて船やうやく入り乱れ発砲せりやく

劇烈よ及べ勃々たる黒煙り日光を覆ひて雲船上より起る
 るが如く輪々たる響き水底に震ゆる雷龍宮に集るる疑ふ
 たりたり双方の勢ひ洪大なる戦争數時間及べども一
 勝一敗さうみ雌雄を決せざり茲みかりく納爾森大のみ氣
 を苛ち自ら船隊のうちみ入り頻りみ船を進まりて仏蘭西
 船と西班牙船の間へ乗込猛威を震つて撃破せり然るに
 仏西の西海軍とさう為し追崩されまをみ敗北の色見えたり
 然れども猶うち出ま大小砲の弾丸に風みたをりる霰に向ひ
 面を打り如くあるを納爾森まこも恐るる船の艦に衝立
 味方を指揮せ居たり一が空氣を鳴りて飛來る弾丸憐む

べー納爾森が肋骨碎りくち抜きたる故英國無双の猛將を
 その傍をこみ倒したる人々驚きあをを援け船を廻らし戦所
 をさけり療治せんと為しなれど僅りみ三時間を過して死
 したり然れども納爾森が猛勇なる働きみより既し七八分の
 勝氣見えたるをりあるに納爾森よかたりて「アドミラルの
 官職たるコリンウッドと云ふ者総軍を指揮せり大りみ是
 を破るる然るに佛西兩國の軍艦十八艘を打ち碎きあるに
 ハ乗り取りフレガット七艘のどしたる皆悉く破砕し棄り
 爰に於て残り十五艘の敵軍の船の頭を廻らして西班牙國の
 都府ある加的斯の港へ逃込ぬ然るにその度の戦争み比類少

多き大勝を得たるに全く納爾森が勇武小因ると惜いふ
 納爾森砲九一発の響きの本四十七歳を一期として泉下の
 客と成りたること自然と其英名の千古不朽小夷きと殊
 みあの海上を航するもの英佛西の三軍艦が兵を合せし往
 昔と思ひ水師提督納爾森の英風今人々をく追慕の袖を
 濡さむトラハルガルの岬をりて一跡とるなりたり
 再説あの度の戦争大勝利を得ふれば英吉利海軍倍威名
 を振へども提督納爾森流丸なりり討死させしより英全
 國の人民あを惜み歎き大い力を失ひぬ納爾森の大功
 かく數回の後つひ小國土の爲小命を落したる德澤小報ん

と上下の衆議一決し納爾森
 の弟「ウイリヤム。ネルソンを
 諸侯の列に加へ年々役料と
 て一万八千圓の金を與へ姉妹よ
 へ土地を買ふべき料とて三万圓
 の金を與え納爾森の遺骸へ
 翌年正月九日倫敦府下ある「セ
 ントパウル寺」に禮を尽して葬
 せり是千八百六年今より七十
 九年前の事めて納爾森が銅



倫敦市中
 郵便の
 寫生

標の善美を尽す所以あり

○製砲場ハ「ウーリツチ」と云ふ所ニ在リ製造する品區別ありて各その小屋を異むを鑄鍊坊より大砲を鑄たて細工場より火藥火箭火藥囊とを製しまた雜器庫より數千の馬具車臺および新式の寨堡砲臺兵卒寮とりの摸型と貯へ砲庫より常備大砲二万四千挺と同九三百万を積おくと云ふる以て見ると後得當局の門外ハ亞細亞の諸島より取り歸りし大砲を出一つ

○造船場ハ「ウーリツチ」ニ在るもの廣大よく達迷塞河ニ添長さ十九町ニ設く常備諸種の軍艦を製造するゆゑ鉄を鑄

り大材と引割るとりの蒸氣機關あり其働きの輕便なること既に前條の蒸氣機關の所ニ言るが如し英國の造船場他は勝じて盛大ある所以も國の周圍尽く海あり而已るに其屬國海外万里の地ニ在ると以て自然に船舶數を増し航海の術も熟せば造船の法も随つて宜しと得る故西洋諸國とも英國に託して船を造るの多きも因まると云ふ

○埠頭の達迷塞河の岸よりひとく大いなる堰と設け河の水を導き是は湛へ堀の岸の上より一連に廣大なる倉廩を建てめぐりし船より積来るところの荷物ともの倉の内は積り貯ふ總て萬國に往來する船ハとも此内ニ掛り居る風波の

西洋新書 第七編 下終
三三六
憂ひの素より潮の満干の妨げもみく何れどの大船と雖も
岸の上より直に荷物と積入る事と得るあり斯の如き埠
頭倫敦中みハケ所あり何れも潤さ十九町四間四方ありて宏壯
使用あると述べ尽し難し岸の上より茶箱十二万を納る茶倉
あり穀類十萬二千石余を納る穀倉あり酒類七萬二千石余と
入る酒倉あり雜貨五百十六億五萬貫目ほどの物と納る雜
貨倉あり此埠頭ハ千八百年今より七十六年前み開港あり一
て始めハ商ひ物の諸品を皆小船の中み貯へ置きたり一と
云ふ
西洋新書第七編下終

官許 明治八年 第五月 出版

瓜生政和先生著述

橋本玉蘭齋畫

江藤喜兵衛發兌

